

「試合に出られないのは分かっていたが、部に残ってチームの力になりたかった」。玉野高3年の谷本駿さん(19)は硬式野球部の学生コーチだ。入学前

に患った白血病の治療で留年したため、昨夏に選手としては引退。この1年は裏方に徹した元主将が、後輩たちと「最後の夏」に挑む。(内田貴大)

玉野高3年・野球部元主将の谷本さん

「最後の夏」コーチで

白血病で留年 メンタルも支援



学生コーチとして練習でノッカーを務める谷本さん

岡山市内の硬式野球チームでプレーし、高校野球での活躍を目標にしていた中学3年の11月、急性リンパ性白血病を発症した。治療を考えて高校は近くの玉野高に進学。入学後も1年の秋ごろまで入院が続き、留年が決まったが、もう一度、ボールを握るとい

う希望を支えに、苦しい抗がん剤治療に耐えた。退院して野球部に加わる

と、人格や苦労した経験を「買われた」と振り返る。引退後、2度目の1年生の夏に規定で選手として最後のとなった昨年の大会、三塁コーチボックスからチームを鼓舞し、代打で打席にも立った。

「アドバイスなんてできない。手伝っているだけ」と謙遜するが、クラスが同じでよく相談に乗ってもらっているという山名とが今の目標だ。

退院して野球部に加わる

海至主将(18)は「谷本さんの存在は大きい。チームがまとまらないときもさりげない一言で助けてくれる」と感謝する。戸田健太郎監督(38)は「練習の補助だけでなく、選手に対するちょっとした声かけや気配りで、メンタル面を支えている」と話す。昨夏の大会後、本気で野球をやるのは高校が最後と決めた。卒業後は救急救命士を目指す。病気で多くの人に助けられたから、人の命を救う仕事を志す。でも、どんな形でも野球には関わり続けたいと思っている。「選手でもコーチでも好きな野球ができることが自分の原動力だったから」